
HELLO MORNING

懐中車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HELLO MORNING

【Nコード】

N0428I

【作者名】

懷中車

【あらすじ】

朝が好きな男がいた。その男は、世の中に対して、大いな劣等感を抱いていた。

今日も、男は、自分のベッドの中で、自分の朝を迎えるだろう。

だが、ある日迎えた朝は、いつも男が望んだような。

清々しいようなものでは、無かったのだ。

光を見失った男の、迫り来る脅威からの逃走劇。

第一章 朝（前書き）

WARNING! WARNING!

この小説には、ネットで掲載するには不適切な文章が含まれていますので、ご注意ください。

では、本編へ、GO!

第一章 朝

朝が来た。俺の一番好きな時間だ。

窓から板状の橙色の物が、俺の布団に刺さっている。

その光景は、ずっと昔から、子供のときから見ているはずなのに、いつまで見ても飽きない。

それほどまでに、その光景は何か惹かれるようなものなのだ。

布団自体は、カビが中央部付近に繁殖していて、これは年前から発生し始めたものなのだが、ほんの2日で見飽きたところか嫌悪感まで抱くようになった。

それほどまでにその布団は醜い。

そろそろ洗い時かも知れないと思ったがそもそも家にはロクな洗剤も洗濯機もないのでやめた。いや、洗濯機はほんの4年前までは正常に作動していたはずなのだが、ドラム部分が錆付いて壊れてしまった。今じゃ作動させるだけで俺の家で第二次世界大戦が勃発するだろう。俺の洗濯機が日本を勝利に導く。そんなご大層な名誉はうちの洗濯機にはもったいない。もし作動させれば、ご近所からデモ隊が俺の家に押しかけるだろう。もしかしたらもっと大事になって、俺の洗濯機が原因で日本中の赤ん坊が眠れない夜をすごすかもしれない。

そんな猿も笑わないような妄想を繰り返していると、無償に腹が減ってきた。昨日の朝から何も食べていない。

冷蔵庫には、少しの肉があった。しかしこの肉は4年前に調達した肉なので、食に厳しいこの日本でこんなものを食べようとする俺は、恥知らずの恐れ知らずなのだ。

肉をアルミホイルから取り出すと、案の定悪臭がした。しかもその悪臭は部屋の中まで充満する始末。

いざ調理しようと思い、フライパンで焼いてみると、以外にも香ばしい匂いになった。だが市販でよく売っている牛肉を焼くのはわけが違う。

火が通るのが遅すぎるのだ。

4年前からこの肉を焼いて食べているが、何年たってもこの待ち時間はつらい。腹が悲鳴を上げている。早く食べたい。食欲が増しにまして腹が鳴る。俺の腹はせっかちなのだ。

やっと肉が焼けると、それを皿にもって食べた。味は気違いの食べるゲテモノ料理に魚の腸を混ぜて一週間放置したような味がした。食感ゴムボールを食べているかのようで、硬くてとても俺の歯では太刀打ちできなかった。

ミキサーにかけ、何度か噛み砕いてやっと完食した。途中で鼻に力を入れすぎて、違和感を感じたと思えば、鼻血が出た。朝食でただ肉を噛んでいるだけで流血沙汰になるのは、日本でおそらく俺のみ

だろう。

テーブルから立ち、今では時代遅れなレトロなTVに電源を入れる。ニュースがやっていた。どうやら4年前に起きた行方不明事件の捜査が根詰まっているとのことだった。

「・・・」45歳前後の女性が行方不明になってから、今日でちょうど3年になります。警視庁では改めて女性の身柄の調査と、女性の知人などに聞き込みをして、調査を進めていく方針で・・・」

女子アナが席でニュース原稿を読み上げている姿を見ると、心が癒される気がした。

この女子アナはなかなか賢才瞬麗で、個人的に気に入っている芸能人の一人でもあった。

しかし、その女子アナが凶悪な事件の詳細を述べているのを見ると、

なんだか心苦しい気になる。そんな原稿読まなくてもいいのに。いや、こういう原稿を読ませているAD、あるいはこういう原稿を作り出す元となっている世の中が悪いのかもしれない。

外を見ると、高校生たちが4人楽しそうに通学路を歩いている。まさに青春というやつだ。その青春を4年前に投げ捨てた俺はただ、そいつらが楽しそうに青春を謳歌しているのを指を加えてみていることしかできなかった。

ニュースに飽きると、古びた家の古びたポストから新聞を取り出した。

新聞にはニュースで言っていることと、同じようなことが記事にされていた。こういう情報の重複というのはどうにかならないだろうか。

よく大きな事件が起きると、その時間のバラエティ番組やドキュメンタリー番組が、すべてその事件の詳細を事細かに述べるニュースと化する。更にそのニュースのキャスターは、事細かに詳細を伝え終えると、また最初から詳細を反復しだす。これがまだ1チャンネルぐらいならまだましだろう。だが、チャンネルを変えても変えても、その同じ内容を伝えるだけのニュースだらけで、高視聴率を取れたであろうような番組はその面白くなく、一度見れば需要のなくなるニュース番組に上書きされる。

もし自分がそのような境遇に出くわしたら、俺はマスメディアの視聴者に対する嫌がらせとしか受け取らないだろう。

新聞にざっと目を通し、テレビ欄のページだけを机の上において、後のページはゴミ箱へ投げ入れた。

しばらくすると、誰かが家のチャイムを鳴らした。

家はごく一般的なマンションの、少し風通しの悪い561号室だ。特に目立った場所にあるわけでも無く、どこかぱっとしない位置にあった。ちなみに5階である。

チャイムは2回鳴った。連続したチャイム音が耳に響く。朝っぱらからこうもうるさいと、せっかくのお気に入りの時間が台無しではないか。

機嫌悪そうに出て、相手を苛立たせよう。俺が怒っていることを主張するんだ。

顔をいかにもしかめつらせて、玄関を開けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・よっちゃん。久しぶり。」

怒る気が一気に失せた。

こいつと会うのは何年ぶりだろうか。かつて中学の恋人。俺の幼馴染でもある。

母親と2人暮らしだった俺は、6年前に住んでいた町からこの町に引っ越してきた。

引っ越した理由というのが、母の勤め先であった風俗店が破綻し、多額の借金を抱えた。

母は俺を連れて借金から逃げ延びようと考え、長年過ごしてきた町に別れを告げる決意をした。

そのときに、ほんの一部の人にしか引越しの挨拶をしなかった。あまり多くの人に、自分の所在を知ってもらいたくなかったのだろう、本当に世話になった人にしか、母は顔をあわせようとはしなかった。

そんな臆病な母をよそに、俺はこっさり、こいつのところに挨拶にいった。

こいつは、俺が遠くの地に引っ越すと聞くと、玄関で泣きじゃくってしまった。俺のために泣いてくれたというのが、中3の俺にはうれしかった。

そして帰り際、こいつは俺のファーストキスを見事きれいなフォームで奪い去った。

なんでキスしたの?と、聞くと、二人が永遠につながっていられるようにという、なんとまあ恥ずかしい台詞を吐いた。

そんな台詞を軽々しく言えるこいつの度胸と、俺に対する愛が、とても、心にしみたことをよく覚えている。

あれ以来、連絡も一切つかず（当時の俺は、携帯電話なるものを持っていなかった）、ずっと疎遠になっていた。

あれからいったいどうしているだろうか。何をしているだろうか。などと考えたこともあった。が、俺はこいつに会いに行かなかった。家は昔と変わってないはずだ。しかし、面倒くさがりな性格の俺は、考えるだけで、そいつのことが今でも好きなのだと思い込み、満足してしまっていた。

そんな風に、ずっと連絡をとっていなかったこいつが、なぜ急に俺の家に現れたのか。

それに、引越し先も教えていないのに、なぜ俺の家の所在地がわかったのか。引越し先は、以前挨拶にいった所の、誰にも伝えていない。

聞きたいことは山ほどあった。

部屋をあらかた片付け、恋人を部屋の中央のテーブル付近に座らせた。

俺は冷蔵庫から、肉の悪臭がばれないように瞬時にお茶を取り出し（この時部屋はすでに換気されており、匂いはほとんど無かった）、適当なコップに注ぐと、恋人の前に差し出した。

恋人は、何の抵抗も無く、そのお茶を若く瑞々しい唇に運んだ。

「このお茶、おいしいね」

「どうも」

お茶が高評価を受け、俺は適当な返事で応えた。

「よっちゃん、あれからずいぶん変わったね。それでもまだ私の好きだよっちゃんだけど。」

「変わったのはお互い様だろ。 鮑^{カンナ}」

とはいったものの、恋人、鮑^{カンナ}はあれ以来、全く変わっていない。中三の夏に俺があげたヘアピンも、まだつけてくれている。うれしい限りだ。

「よっちゃんは、今どうしてるの？ 大学とかいたりしてるの？」
「俺は、高1の時、高校辞めて、そこから作家育成の専門学校行ってる。お前は？」

「私は、あれから警察官になったの。婦警って行ったほうがいいのか。5年前の事件を追ってるの。」

「お前が、婦警か・・・4年前っていうと・・・45歳の女性の行方不明事件か・・・」

「・・・あのよっちゃんが、ニュースを見るなんてね。明日は槍でも振るんじゃないかな・・・」

「なめんな。」

学校にいつていると言ったが、あれは嘘だ。今の俺はフリーター。バイトを転々としている社会不適合者

普通なら、今の時間学生なら、講師からいろいろな知識を与えてもらっている時間に、俺は家で朝からカビの生えた布団から起きて、腐臭のする肉を食べただけ。

食生活も危うい男が、学校なんざ行っている暇も無いのだ。

嘘も交えての、他愛も無い会話。けど俺は、とても楽しかった。

ここ数年人とあまりしゃべらなくなっただけ、深く関係を築くのは、かえって疲れるだけだと、人間関係を蔑ろにしてきた。

けど、こう話していると、その考えを改めようかとも思えてくる。

かわいらしい笑い声。変幻自在な表情。

カシナ
鉤を見ていると、とても楽しく思えた。

そうだ。これを気に、部屋を掃除しよう。

洗濯機も新しいのに変えよう。平和な我が家を取り戻すんだ。

冷蔵庫の肉も処分しよう。おいしくてジューシーな肉で、朝を彩ろう。

布団もクリーニングに出そう。夜、カビと頭の位置を気にしなくてすむように。

カシナ
鉤のおかげだ。鉤が家に来てくれたおかげで、俺の生活は、よりい

っそうすばらしいものになることだろう。そこいらの社会人も真っ青だ。

だけど、聞いておきたいこともある。何をしにきたのかはわからないが、なぜ、俺の家がわかったのか。これだけ聞いて、鉋にキスしよう。

ありがたいと、感謝を交えてのキスだ。

そう思った矢先、鉋^{カンナ}が俺の質問をしてきた。

「よっちゃん。ちょっと聞きたいことがあってきたの。もちろん、会いに来たってのが一番の理由なんだけど」

「ああ、俺も聞きたいことがあるんだ。どうして俺の家がわか」

グ
シ
ャ
ッ

ス
タ
ス
タ

気がつくと、部屋の真ん中に立っていた。
いつのまにか、鉤はいなくなっていた
変わりに視界にあったのは、大きな白色の、球体だった。朝日だ。

俺の一番好きな、時間になったらいい。
が、それ以外の、深く捻じ曲がったビルや、緑に変色した空や、黒
い雲は、どう見たって。

俺が望んだ、あの清らしい朝では、無かったのだ。

第一章 朝（後書き）

どうも、懐中電灯をなくした男です（！？）停電のときどうすんだ
よ俺・・・orz

さて、小説の構成ですが、どうだったでしょうか？もし、読みにく
いなどと意見をいただいたなら、改善してゆきますので、よろしく
お願いします。

小説の内容については、私は多くは語らない主義なので、温かい目
で見てもらったら幸いです。

さらにこの小説にも目を向けてくださったなら、私は呼んでくれた
あなたを好きになります（！？）

では、今後の懐中車に、ダブルリアット！（！？）

第二章 奇（前書き）

アップが遅れてしまいました。

まあ、読者も少ないんだけどn（ry

ちよっぴりグロ描写（？）らしきものが入っておりますので、そういったものが苦手な方はお気をつけください。

では、本編へGO！←

第二章 奇

さて、状況を整理してみよう。

俺はマンションを降りて、下の玄関口にある自販機までジュースを買いに行った。

・・・それ以来記憶が無い。我ながらずいぶん浅はかな記憶力である。

しかし、覚えてないものは覚えていない。手元にジュースはないし、部屋に^{カンナ}鉋もない。さらにはいつこの部屋に戻ってきたのかも覚えていない。

・・・極めつけは、眼下に広がる異常な光景だ。

唯一知っている色形をしていたのは、あの朝を彩っていた太陽だけで、そのほかの造形物なんかは、とても俺が見たことあるようなものでは無かった。

まず、空が緑色なのだ。

本来なら木々に広がっているはずの深緑は、どうしてか地平線までその空を覆ってしまっている。ずっと見つめていると、頭が痛くなってきたそうだった。

その次に目に入ったのは、大きく捻じ曲がったビル郡だった。本来ならまっすぐ大地に聳え立っているビルは、重力を無視して心太のように垂れ下がっている。

その光景は実にシュールで、こんな自体だというのに笑ってしまいそうだった

お次は黒い雲だ。白はずの雲が、見事なくらい真っ黒に染め上がっている。

雷雲も、そこそこ黒いが、今俺の目の前にある雲に比べたら、淡いグレーと化してしまうだろう。

そのほか、言いたいことは山ほどあったが、俺はこういう状況の場合の、お決まりの台詞を唱えることにした。

「・・・・・・・・どこだここ」

「・・・・・・・・ま、まずは探索だ。そう、探索」

落ち着いて自分に活を入れた俺は、まず、自分の部屋を搜索し始めた。馴染み深い部屋だ。なにか手がかりがあるに違いない。

手始めに押入れを開け、布団を調べてみた。あのかび臭い匂いは、俺を安心させてくれるとおもったからだ。

いざ布団を持ってみると、不思議と違和感を感じた。

布団を広げてみた。昨日まで行っていた行為だ。布団を引き、その中のカビの匂いの中で寝る。

ところがその布団は、まるでさっき買ったばかりのような、真っ白さを誇っていた。

カビが、消えているのである。

あれだけあったカビが、ひとたび部屋を出ただけでは消えるはずが無い。

俺は不安に刈られた。

冷蔵庫を調べてみた。あけたときの悪臭は無く、肉「だけ」がなくなっていた。

洗濯機を調べてみた。あの爆音は無く、普通に動いた。

部屋をくまなく調べてみたが、見た目は同じでも、数箇所、俺の部屋とピンポイントに違う所があった。

頭が混乱してきた。なぜ俺はこんなところにいるのか。なぜ部屋が微妙に変化しているのか。

考えるだけでも、気分を害する。今の俺の健康状態はすこぶる最悪だろうと思った。

部屋を調べるのをやめ、外に目を向けた。

外は相変わらずの異様な光景で、この世の終わりかのように思えた。

俺は、外に出てみようと考えた。外に出たのなら、何かわかるかもしれない。ここがなんなのかのヒントがあるかもしれない。

まず、マンションを下の階まで降りようとした。ジュースを買いに行こうとした、一番下の玄関先にまで降りようと思った。

すると、となりの562号室の扉が開いた。その扉から、小さな、人の影が見えた。

人がいた。心のうちの恐怖が、安心へと変わってゆく。ほっとした気持ちで、その扉に駆け寄った。

扉を開けた人物を見たたん、愕然とした。

右腕が無い

右目が無い。

右わき腹が無い。

出てきた老人は、死人だった。

ほっとした気持ちは、一瞬にして恐怖へと再変換され、絶望の文字にへとグレードアップした。

「う、うわあああああ！」

俺は床にへたり込んだ。足が震える。振るえをとめようとしても足は俺の意思とは無関係に震え続ける。

情けない声が出る。しかし、出さずに入られなかった。歩く死人なんてみるのは初めてだから。

こんなことがあるのか？いくらなんでも、これじゃゲームの世界じゃないか・・・！

外の異常な光景といい、「ここ」はいったい何なのだ？死人が歩く町なんて、ゲームの中だけで十分だったのに、畜生、なんだっていうんだ！

早く帰りたい。

カシナ
鮑に会いたい。

家で肉を食べたい。

カビだらけの布団で寝たい。

あの墮落した生活を、ここまで望んだのは初めてであった。いや、少なくともこんなところよりかはマシだろう。

こんな、こんな死人が歩く町なんぞよりは……！！

[illegible]

ふと、小さな音に気づいた。どうやら、この死人が何かしゃべっているらしい。

俺は身構えた。死人が歩き、しかもしゃべるだと……？　ますここが嫌いになってきた……神様よ……もしいるのならここから出せ……。出さなきゃ二度とお前を信じたりしない。

老人はこちらにかまわず、何かをつぶやき続けている。なんなんだ・
・・・・俺に何を伝えようとしているのだ。

死人の戯言など聞きたくない．．．．．頼む．．．．．帰らせて
 くれ．．．．．ストレスが半端じゃなくなってきた．．．．．
 帰りたい。帰りたい。帰りたい。帰りたい。帰りたい。帰
 りたい。帰りたい．．．．．

「帰ってどうするとうんだ・・・・・」

「っっ!？」

急に考えていることと同じような内容が、死人から聞こえてきたので、俺は目を大きく見開いた。

なんだ。もう。心臓に悪い。これ以上心臓に悪い出来事なんて起きてほしくないのに。

だいたいこいつ・・・死人の癖にしゃべるな！死人は死人らしくおとなしく墓地で墓の下にでも埋まってる。

「ずいぶん言い草じゃないか・・・いや、この場合思い草って感じか」

「はっ・・・!？」

びくっと体が反応した。理由はさっきからこいつが俺の考えていることに対して会話をしているからだ。

声に出したか？いや、口はずっとはっはっ、と一定のリズムに合わせてがたがた動いているだけだ。声に出したりなんかしてない。

ならば考えられることは・・・

こいつには俺が考えていることがわかってる？

「ご名答だ」

「うえ……!? な、なんで……!?」

有り得ない! 声も出してないのに! 読心術か何かなのか!? 勘弁してくれ! こんなほぼ左だけの奴に心を読まれるなんて冗談じゃない! 気味が悪い! 畜生! なんだってんだ! 何がどうして俺はこんな明らかに「おかしい」ところで、ほぼ右側が無い動く死人に、こんな的確に心を読まれなくちゃならないんだ! ああ、頭が痛くなってきた! 気を失いたい! 失って、あのかび臭い朝を迎えたい!

どうせこれは夢なんだろう!? そうなんだろう!? 昨日、カンナ 鉋と酒でも飲んで、そのままセックスして寝ちまったに違いない! そして二日酔いでこんなふざけた夢を見てるんだ! そうだ! きつとそうなんだ! だったらとっとと覚めてくれ! 悪夢なんざまっさらだ!

「黙れ。喧しいぞ小僧」

「は、はい……ってか黙るっただってお前が勝手に読んでるんじゃないか……!!」

落ち着いてきたのか。俺は死人に向かって反論した。

どうせ夢だ。何を言おうと勝手。ならばこんな奴、怖くも無い。ちよつとリアルな夢で気味が悪いが、夢ならばどうということは無い。そう思うことにした。そう思わなければ、心が碎けてしまいそうだからだ。

息を整えて、重い腰を上げて、俺は死人と面向かった。

よく見てみると、性格には右腕は完全に失ったわけではなく、上腕二頭筋はまだ体にくっついたままだった。

わき腹は、見事なまでに無い。まるで動物に食われたみたいに、抉り取られていて、そこはぽっこりへこんでいた。

右目があったはずの場所は、虫歯をわずらったような真っ黒な色で染まっていた。

俺にあるようなくりんとした眼球はかけらも見当たらなかった。

本来なら死んでいるはずの、この老人。まるで傷など無いかのように平然としていて、残った左目でこちらを見続けている。

その眼差しは、どこか不気味で、どこか悲しそうだった。

俺は、こいつに聞いてみることにした。

ここがどこであるか。なぜ俺はここにいるか。

面白い夢だったらいいな。たとえば俺はすでに死んでいて、ここは地獄だー、とか。

またこんな妄想。猿も笑わないな。鉋^{カンナ}が聞いたら飽きれるに決まっ

「よくわかったな。ここは地獄だ。」

・・・？こいつ、何言っただ？よく聞き取れなかったぜ。ははっ

さすが夢。言ってることが何かってよくわからないことがあるよな。あーあー、早く覚めないかなあ。もう面白い夢でもないし、さっさと起き

「後、夢でもないぞ。」

それにしても腹が減った。今日はあの肉をどんな風にして食べよう。
蒸すか、焼くか、はたまた煮るか。
アイディア豊富だな。俺って。流石俺。学校なんて行って無くても
こんなに料理が上手にな

ドゴッ

「ぐふっ・・・！」

急にみぞおちを殴られた。老人だけあって力は弱かったが、それでも俺の脳内を一時停止させるには十分な一撃だった。

足に力が入らなくなり、俺はまた仰向けに倒れた。

仰向けに倒れた俺を、老死人ってところか、そいつが俺を見下ろしてくる。

見下ろしながら、そいつは俺に静かな口調で、確かに言い放った。

「ここは夢じゃねえよ。死んだ悪人が来る所。」

「お前が言った通り、ここは」

「地獄だよ。」

本当に。悪い、夢だよ。

第二章 奇（後書き）

さて、どうでしたでしょうか。第二章。

大体話の筋としては、まだまだ序盤のほうですが、がんばっていき
たいと思います。

話の細かい点で、「こうしたらいいよ」とかなどがありましたら、
小説評価にてご報告いただければ幸いです。

追記；懐中電灯見つかりました（

第三章 遭（前書き）

WARNING! WARNING!

この小説には、グロテスク描写が含まれております。

そのような反PTA物質が苦手な方は、ご注意ください。

では、本編へ、GO!←

どうやら患者の恋人らしかった。それもかなりの美人である
その騒ぎようといったら、町工場の騒音のごとくだ。

うとうとしながら院内を散歩していた老婆が、その急な騒音にびっ
くりして杖を落とした。

そんな老婆には一筋の視線もくれずに、担架はある場所へと向かっ
ていた。

そのある場所の扉の前で、女性は入室を禁じられた。

「おねがいです！中に入れさせてください！」

必死に訴える女性。しかしその願いは常識という壁に押しつぶされ
る。

「駄目です！一般の方は入室を禁じられていますから！ここで待っ
ていてください！」

「そんな・・・・・・・・」

嘆く女性をよそに、医師たちはある場所へと担架を運び、踏み入れ
ていった。

ある場所へと駆け込んだ数名の医師らは、運び込んだ患者を台に乗せ、ある担当医の到着を待つ間に、ある作業を行う準備を شدした。彼らは皆汗をかいていた。

「応急処置！ 急げ！」

「消毒したか！？ してないなら別の奴もってこい！」

「執刀医はまだか！？」

「竹原先生がこちらに向かってくれています！」

と、若い男を一括したとたん

バタンツ

「患者の容態は！？」

突如初老の白髪が生えた短髪の男が、その場所へと入り込んできた。

「竹原先生！」

「容態は、脳震盪。全身骨折、出血多量、全身打撲！主に背筋部の損傷が酷く、肉は取れ、むき出しになった背骨に巨大なヒビが入っています！」

「さらに出血も酷いです！主な出血場所はさきほど申した背筋部！それに全身打撲による出血も多量！流れ出た血液の量が500ccを越えています！」

若い男を一括した医師が、竹原先生と呼ばれた初老の男に、患者の容態を伝える。

竹原はすぐさま作業着に着替え、メスを手に取り、患者の台の横に立ち、医師たちに伝えた。

「これより、天城義人の手術を行う」

医師たちが気合を入れて作業に取り組んでいる一方。

扉の外で、患者の恋人の女性は、静かにその手術の成功を祈っていた。

硬く手を胸の前で握り締め、今にも席を立ちそうに全身をこわばらせて、呻くような声で、声を押し殺して言った。

「よっちゃん……死なないでえ……！」

その悲痛な美女の叫びは、果たして天に届いたのだろうか。

その美女の願いを、果たして神は聞き入れたのだろうか……

歩き出した。

俺はふと、死人の顔を覗き込んだ。

その表情は無骨で、笑う姿が想像できないほどだ。

右目を蝕んでいる洞窟は、一定のリズムでヒクヒクと動いている。

残った左目は、死んだ動物のような目をしていて、視線は空に浮いていた。

正直……

正直……

「きもっ……」

「何か言ったか？」

「いや……」

率直な感想だ。悪いことはしてない。と思う。

「十分悪いことだ。率直な感想と称すれば悪口が美化されると思うなよ。」

「何読んでんだよ……」

「後俺にも名前はある。藤林宗吾だ。65歳だ」

「そんなこと細かく聞いてねえよ……」

死人の個人情報なんぞ知りたくなかったよ。

あの後俺は、初老の死人、もとい藤林宗吾に、

「ついて来い。お前に、チャンスをやろう」

といわれ、マンションを降りて、宗吾に言われるがままに、道路のど真ん中を歩き出した。

歩くたびに、異様な光景が視界に飛び込んでくるのにもうなれてしまった俺は、次は空を見上げた。

緑の空に、黒い雲。うむ。俺が知っている昼下がりとは天地ほどの差だ。

俺が知っている雲は、こんな黒ではない。俺が見上げて空は、こんな禍々しい緑色をしていなかった。

こいつの言ったことがまだ信じられない俺は、改めて聞いてみることにした。

違う答えが返ってくるという、淡い希望を信じて。

「もう一回、言ってくれないか。」

「・・・・・・・・」

藤林宗吾は、無骨なその表情を一切変えない。

それは、答えが同じってことなのか。

いや、きつと違う。別の答えが返ってくる・・・・・・・・

「ここは、どこだ」

「地獄だ。死んだ悪人が来るところだ。詰まるところ。お前は死んだんだよ」

即答だった

マジで・・・ここは地獄なのか・・・この俺が、死んだだと!?

「嘘だろ・・・ありえねえ・・・糞ッ!」

俺は地面を蹴った。悔しさを地面にぶつけた。

俺が死んだなんて、今でも信じられない。けど・・・

さっきのみぞおちの痛みが、夢でないことを証明している。痛みはまだ続いている、嫌というほど現実を誇張してくる。

この光景が、ここが以前俺がいたところとは違うということを知ら

せている。

もう一度上を見上げると、緑色の空を、片翼の翼で飛んでいるカラ
スが見えた。

いつ死んだのか。どう死んだのか。全くわからない。

今わかることは、俺の人生はここで終わりってことだ。

「畜生・・・畜生・・・ッ！」

涙がこぼれてくる。

そりやそうだ。いつの間にか人生が終わってたんだから。

まだやりたいことがあったのに。やらなきゃいけないことが。

あれをしないと。俺は、カンナ鉋に嫌われてしまうかもしれない。

そんなの嫌だ。せっかく。会えたのに。まだ。あれを。あれを。

まだ・・・・・・

マダシタイヲシヨブンシテナイノニ

「俺は言わなかったか？」

「・・・？」

宗吾と俺の視線がぶつかる

「チャンスやる。お前に、もう一度人生を送るチャンスをやろう」

つれてこられた場所は、病院だった。

しかし、その外見はとても人を治療する場所のようには見えなかった。

病院の色が真っ黒と真っ白で半分こなのだ。

左側が真っ黒。右側が真っ白。

そして、左側からは、異常な悪臭が。

右側からは、ほのかにミルクのにおいがした。

何の意味があってこんな色なのだろう。

何の意味があってこんなにおいがするのだろうか。

いや、意味なんて無いのだろうな。ここは地獄。悪人を裁くところ

なんだから。

宗吾につれられて、真ん中の玄関の白い所から病院に入ると、中の廊下も真っ二つに色分けされていた。宗吾は、黒いところには絶対入らずに、右側の白い通路だけを進んだ。俺もそれについていった。黒いほうの通路側をちらりと見ると。

見覚えのある顔が俺とすれ違った

けど、見ないこととした。

宗吾につれてこられて、ある部屋の前まで来た。

「入れ」

宗吾が入室を促す。

その部屋には、「事務室」と書かれた看板が立てかけられていた。俺は言われるがままにその部屋に入った。すると、中には複数の人間がいた。

「うっわまた腕取れたよ俺・・・」

「ガムテープあるわよ」

「うっ・・・うっ・・・ねえ・・・誰か僕のベロしらない・・・？」

「うひひひひいひゃひゃへいえはははははっひゃひゃはひいひひいああ！」

「ミド！そろそろその目玉返しなさい！それは宗吾のよ！」

「夜が来ない・・・夜が来ない・・・夜夜夜夜夜夜・・・あゝあゝあゝ！！！！！！！！」

「うっせえよおまえ！ちったあおとなしくしろ薄暗野郎！」

「あんたがうっさいのよ！本が読めないでしょ！」

「お前目なんか無いだろ！」

「点字よ！見てわかんないの！？」

撤回しよう。

人間だった人達だ。

宗吾が茶髪の若い男の片に手をのせる。

若い男は宗吾に気づくと、振り返って宗吾に

「・・・あ！宗吾！てめえどこ行ってたんだよ！！！」

と言葉をぶつけた。

「すまない。予想以上にてまど」

「てめえがいなかったせいでこいつら自由奔放に動きやがるんだ！」

なんとかしてくれ！後ミドの奴がお前の目玉で遊んでるぞ！いいのかあれ！？それと蘭の奴が宗吾宗吾うっさいんだよ！耳障りだからあれ何とかしやがれ！！後なあ！」

さしずめ言葉のマシンガンである。

「ふんっ」

ボゴアッ

「うぐえっ！？」

宗吾が俺のときにも食らわせたみぞおちへの一撃を男に食らわせて黙らせた後、宗吾は俺をその場にいる全員の視界に移るように前に押し出した。

「お、おい！お前何を・・・」

全員が俺を見る。

さっきの男が俺に突っかかってくる。

「ああ？ んだてめえ……………」

「い、いや、あの……………」

それにしても、口が耳元まで裂けている。

たぶん、死因は口が裂けて、だろう。

それにしても、口がここまで裂けるとは、いったい何をどうしたつていうんだ……………？

「……………んだよ、死んだ割には大して外傷ねーじゃん。」

なんで汚してない理由というだけでがっかりされればならないんだ。

「後ろを试着みる」

宗吾が俺の後ろを指差す。

俺の後ろ？

「うっわ…………エグッ。肉取れてて背骨ポツキリ逝ってんじゃん。お前ほどじゃないけど結構深いな」

……………は？

「お、おい！ 背中、俺の背中どうなってんだよ！ おい！！」

落ち着けといわれても無理だろう。自分の背中が逝ってるといわれて騒がない奴などいない。

しかも肉が取れててだと？ 恐ろしいぐらいの重症じゃないか！！

「落ち着け。その年で死んだんだからなんらかの外傷で死んだのは明らかだろう。それにここは地獄だ。そんなに気にすることでもないだろう?」

「気にするんだよ!!」

俺の心からの叫びだ。

俺がやんやんや背中のことと騒いでいると、後ろから、しかも一番かわりたくないような奴に目をつけられた。

「ね、ね、君、誰???誰???」

緑のモヒカンの頭をしていて、目は恐ろしくにごっている。

歯をカタカタ鳴らしながら、俺をじっと見つめている。

先ほどミドと呼ばれていた奴だ。

おそらく頭が緑だからミドなのだろう。

そいつは、首のど真ん中に大きな傷を、腹部に大きな穴を開けていた。

「き、君、全部ある。全部ある!」

「は?ぜ、全部?」

こいつの状態からすると・・・内臓のことか・・・?

「くれ!それ全部!俺にくれ!」

「は？や、やだよ！何で内臓なんか上げなきゃならないんだ！それに今俺、背中が・・・」

ドゴォッ

メキッ

宗吾の正拳突きをみぞおちに食らった俺。

宗吾のかかと落としを首に食らったミド

手負いの老人に活を入れられてもだえている俺とミドは、男としても情けなく。

旗から見ると間抜けで滑稽な光景であった。

死んだというのに、なぜこんなに痛みを感じてしまうんだ。

ここは地獄なんだろ。理不尽じゃないか・・・

となりで女3人が一緒になって笑っていた。

畜生。

女に笑われたのは鉋以外で初めてだ・・・

宗吾が部屋の中央に立って全員に伝える。

「いいか。後3日だ。後3日で閻魔の奴が来る。」

「まだ人生に悔いがある奴。まだ人生を楽しみたい奴、まだやりた
いことがある奴は、この計画を聞け」

腕をなくした丸刈りの大漢の男が言う。

「聞き飽きたぜ宗吾。そんな前振りはいいから、とっとと内容を練
ろうぜ」

鼻をなくした20代前後の黒髪短髪女が言う。

「あせっては駄目よ。焦りは冷静さを欠けさせるもの」

目に包帯を巻いた黒髪長髪少女が言う

「カサねえの言うとおりでよ。しくじったら、二度とチャンスは無い」

口が裂けた茶髪の男が言う

「いいから、不安がらせるなよ。モチベーション下がるぜ」

首に傷を、腹が無い緑の頭のモヒカン男が叫ぶ

「生き返る！生き返る！俺達生き返る！」

髪をだらしなく伸ばし、耳が無い少年がつぶやく

「生き返ったら・・・また・・・夜が来る・・・」

宗吾にぴったりと引っ付いている、足が無い短髪の少女が言う

「ミド！うっさい！生き返るのは当たり前でしょ！」

舌を失った、まだ10歳にも満たないような少年が宗吾にすがりつく

「ねえ宗吾、この人誰え？新しい人？」

右目がなく、右わき腹が無く、右足が無く、先ほどつけた義足で補

っている初老の老人が言う
「そうだ。俺達は生き返る。地獄の抜け道を探すんだ。閻魔に見つかる前に。」

「人手はそろった。さあ、おいかけっこの準備だ」

急に、カビくさいにおいが漂ってきた。どうやらこの部屋のベッドの匂いのようだ。

あの朝を思い出した。

また、あの愛しい朝を迎えるのは、かなり先になりそうだ。

そう思った。

第三章 遭（後書き）

今思ったけど懷中時計見つかったら俺懷中車じゃないんじゃ（ry
ということ、第3章です。

最近ゆめにつきと歪みの国のアリスというゲームをやりましたね。
どちらもホラーなのですが、なかなか手が込んで面白かったです。
特に後者はお勧めですので、ぜひプレイしてみてくださいね。

本編の文中でこうしたほうがいいんじゃない？みたいなものがありましたら、評価欄にてご報告させていただければ幸いです。

後内容についての質問も受け付けております。（てか・・・読者いるのかこの小せt（ry）

更新ペースは、週土日になりそうです。

では、次回の懷中車に、チョークスリーパー！（？

第四章 策【前】（前書き）

更新が少し遅れてしまいました。

いつもどおり、グロ描写が苦手な方はご遠慮ください。

では、本編へGO！←

第四章 策【前】

日が落ちる時間。空に君臨していた王が墜ち、紫色に似た色が空を埋め尽くす頃。

少し心がざわつく。

それに合わせるかのように、体は落ち着きを無くしていく。

足は貧乏ゆすりを始め、手は常に動かしていないと気がすまなくなり、とうとう体が家の周りをうろうろする有様と化す。

待ち望んでいる「その時」が来るのを、体や心が急かしているのかもしれない

それとは逆に、この時間は、とても静かだ。

秋の夜長にふさわしい静けさを、俺の家にもたらしてくれる。

俺は、この時間も好きだ。

日が昇る時間。草花が活気付き、雀が電柱でさえずる頃。

俺はいつも人一倍早起きだ。布団から疾風のように飛び起き、私服に着替えて、洗面所へ向かう。

顔を洗顔フォームで洗い流し、タオルで顔をまんべんなく拭く。

そうして、窓を開ける。

窓を開けると、太陽が地平線の向こうからわずかに顔を出しているのがわかった。

そしてその太陽が放つ光は、俺の部屋へと一直線まで伸びてゆき、最終的には俺の部屋は華やかな山吹色に染まる。

染まってゆく過程を見ていると、心がとても清清しくなってゆくの、俺は心と体で感じていた。

他人との劣等感。

世間からの俺を殺すかのごとく鋭い視線。
自己嫌悪。

これらを全て、その清々しい空気が忘却の彼方へ消し去ってくれる。
だから、俺は朝が好きなのだ。
後もうひとつ理由はあるのだけれど、それはまたの機会にしよう。

それにしても、こうして思うと、自分が実に弱く、愚直で、無様で、臆病で、卑怯で、常に保険として逃げ道を作っている自分が浮き出してくる。

こんな理由では、まるで、自分が楽な気持ちになりたいがために、朝が好きだといっているのかのように聞こえるだろう。

そのとおりである。自分は、きっとこんな生活から、こんなつらい現実から逃げるために、朝の世界へ逃げ込んだのだ。

高校を辞め、バイトと転々として、そして今では無職となってしまう。
った。

昔稼いだ駄賃のようなはした金で生活する毎日。
スーパーへ行けばそのだらしない生活ぶりに世間からは容赦のない言葉の暴力。

現実で待っているのは、いつもこんな障害ばかり。
世の中で成功した奴などを見れば、たちまち殺気が湧いてくる。

しかし、先ほども言ったとおり、朝になってしまえば、そんなつらいことなど、何もかも忘れていられるのである。
自分にとって、清々しい朝は、ドラッグのような中毒性のある薬物

の代わりとなってしまうているのだ。

実に情けない。実に滑稽。

自分のまいた種に恐れて、何かにすがって生きていく自分。

何かに頼って生きなければ、自分を見失ってしまう者。

それが俺なのだ。

それが俺、天城義人なのだ。

だから、今のこんな状況も、寝て、朝になれば全てなくなってしまう。
っている。

きつときれいな気持ちで、朝を迎えられると思った。

結論

現実是非情である。

「うゝっ……!!」

ベッドで寝ていた俺の腹部に、何か大きな、そしてかなりの重みを携えたものが大きく振り落とされた。

その衝撃で、ベッドは揺れ、俺の脳内を漂っていた睡眠波は見事きれいに消滅し、残ったのは俺の腹部の痛みだけであった。

その重みの正体は、小さな少年だった。

「ねえ！聞きたいことがあるんだけど！」

その少年は、俺の腹部の上に乗りながら、大きく口を開け、元気いっぱいに俺に質問をした。

それを見上げている俺としてはその光景は迫力があり、俺は少々気圧されていた。

その少年の舌は、根っこからちぎれて無くなっていた。

事は、先日へと遡る。

「宗吾！こいつ役に立つのかよ！」

茶髪の男が俺を指差して、宗吾へと詰め寄った。

宗吾は俺のほうへ近づいてくるなり、俺の肩に手を置いた。

「そんじょそこらの奴をほいほいメンバーに入れても仕方ないだろう？」

無気力な表情で、宗吾は茶髪の男にアンサーを返した。

しかし、茶髪の男はいまいち理解ができていないようだった。

「ど……どういことだ？」

宗吾の足にしがみついていた少女がやや挑発気味な態度を茶髪の男に見せた。

「凜平、最近ここに来る奴らは殆どが自殺者なのよ？ 生き返る気がない奴らを仲間にしてどうすんのよ。なんなの？ 考えることを考えることもできないの？」

この少女、相手が20歳前後、自分は13歳程度の年齢だというのに、この度胸はどこの誰の受け売りなのだろうか。一切引けをとっていない。

もし自分なら、こんな肝の据わった行動は無理だろう。

「んだとお蘭！ てめえが一番下の癖に威張ってんじゃねーよ！」

「黙りなさいよ口裂け男！ ろくな死に方してないくせに！」

どうやらこの二人の相性はとてもいいとはいえないようだ。それにしても、ここにはいろんな傷を負った人たちがいる。たとえばあの大漢、左腕を丸々義腕だ。

いったい何をしたらあのようになってしまうのだろうか……

「なんだ。俺の腕がそんなに変か。」

急に男の顔がドアップになる

「うわっ!？」

俺はいきなり視界が男の顔でいっぱいになったことに驚いて、思わず腰を抜かして仰向けに倒れてしまった。まるでマンションの時みたいで、デジャヴを感じた。

それにしても、吃驚^{ビックリ}した……………

腕に氣をとられて、男が近づいてきたことに全く氣がつかなかった。まさに油断大敵。これからこういうところを直していかねば。

「なさけねえなあ……………これじゃ、凜平の奴が頼りないと思うのも、わかる氣がするぜ……………」

自分でも、なんてぎまだ。なんて思ったりした。

一日で2回もしりもちをつく男など、早々いない。

心がまだ据わってないんだろうか。俺は周囲を見渡しながらビクビクしていた。

「ま、これから同じメンバーだ。俺は厳望。よろしく」

「は、はい。よろしくお願いします。」

「おいおい、敬語なんて使うな。ため口でいいんだよ」

表情も体もがちがちの俺の肩を、厳望はその大きな右腕でバシんとたたいた。

たたかれたとき、昔感じていた、懐かしい感じがした。

大きな大漢、厳望は、俺に向かって輝かしいばかりの笑顔を送った。

人のよさそうな、優しい目つき。

腕をなくしていても、それを気にする様子はなく、俺に気さくに話しかけてくれた。

ようやく、安心できる人物と出会えた気がした。

安心したので、厳望に、俺が一番気になっていることを質問してみることにした。

「えと、質問、いいかな？」

「ああ、なんでも聞くといい。」

「えと、メンバーって……なんのことなのかなって……」

厳望は急に大声を上げた。

「おいおい！？宗吾から何も聞いてないのか！？……おい宗吾！」

厳望は宗吾に呼びかけた。が、宗吾はそれに反応しない。

「てめえその義足誰が作ったんだと思ってんだ！？ああ！？」

「誰が作ろうと関係ないでしょ！うるさいのよ、この口裂け！」

「こんの糞餓鬼……ッ！！！！！！！」

「うるさい。鼓膜が痛くなる。少し黙れお前たち」

相性最悪の二人の仲裁になっている宗吾は、その二人の言葉のドツデボールゆえ、厳望の声が聞き取れなかったらしい。

厳望があきれた顔で3人を見つめる。

「すまん、あいつら何かあるとすぐこうなるんだ。」

厳望はそういうと、俺を事務室の机の椅子に座らせ、残りのメンバーを俺の前に連れてきた。

厳望は、その一人ひとりを俺に紹介した。

「紹介しよう。この鼻の無い女が、笠葉だ」

「厳望、「はな」の無い女だなんて、女性に対して失礼な言動よお？」

「すまん。言葉のあやだ。んで、こっちの包帯少女が瑞葉だ。」

「厳望、カサねえは「はな」の無い女なんかじゃないよ」

「わかったわかった。次に、こっちのモヒカンがミドだ。少々言動に問題があるが、気にしないでくれ」

「ゲンボー！ゲンボー！ゲンドウってなんだ！？面白いもんか！？」

「……んで、こっちの小さいのが、正春。皆からはチビって言われてるな。」

「この人が、新しい人？なんかひよろいよ？」

「そういうな。そして、こっちの暗い奴が、睦月だ。」

「……………」

「いや、何か言いなさいよ睦月」

こうしてみると、本当にいろんな人たちがいる。

鼻がない女性、目が見えない少女、喉に穴が開いてる男、舌をなくした男の子、耳が無い根暗な人。

皆、何かしら無くして、ここにいる。

俺は、自分もこの人たちと同じなんだと思うと、とても悔しく感じた。

何かをなくした自分がいるのを、許せなかった。

俺は、小さく唇をかんだ。

「……で、メンバーについてだな……笠葉、説明してくれ」

「嫌よ、私、説明苦手なもの。貴方が説明すればいいでしょう？」

「何だよ……俺も説明なんて難しくてできねえよ……」

説明が難しいという、厳望や、笠葉の性格に、俺は親近感を感じた。実を言うと、俺も説明が苦手な人間である。

教えてくれといわれても、自分はそれを感じて覚えているので、どう言葉にしたらいいのかわからない。

それがいわゆる、説明下手という奴なのだろう。

「僕が・・・説明するよ・・・」

たしか、この人は睦月、だっけ・・・

髪は肩まで伸びていて、髪の間から見える目が、俺はとても怖く感じた。

どこかその目は、不気味さを持ち合わせていた。

睦月は、小さな声で話し始めた・・・・・・・・・・

「まず、ここはどこかわかるよね・・・」

「えっと、地獄、だよね・・・」

「そう。で、ここは何をする場所・・・?」

「・・・罪人を裁く場所？」

「正解。で、ここの管理者は誰かな・・・？」

淡々と話す睦月に、俺はただ会話の流れに流されるだけであつた。

「え、閻魔大王・・・なんちゃって・・・」

「正解。」

マジか、適当に答えたのに。ほんとに閻魔なんているんだなあ・・・

そう思ってる間に、睦月は次の質問に移っていた。

「閻魔は罪人に裁きを下す・・・これはわかるよね・・・」

「う、うん」

「正確に言えば、ここは正式な地獄じゃない」

ん？ 正式な地獄じゃ・・・ない？
どういうことだろう・・・

「本来の地獄は、閻魔の元にある。ここは、地獄が罪人であふれか
えないように作られた仮地獄。」

仮地獄・・・？

「罪人たちは、ここで処刑までの日々を過ごす。処刑は、君が思っ
てる類の、かまゆでだとか、そんなちやちな元だとは思わないほう
がいい。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

次第に、俺は言葉をなくしていった。
笠葉が、タバコをくわえて退屈そうにしているのが見えた。

「そして、罪人たちの処刑の日。ここと、本来の地獄がつながる日。
その日だけ、海が真っ黒に染まる。」

睦月の口調は、次第に淡々と話すだけでなく、その言葉ひとつひとつに重みを持つようになっていた。
哑然として話を聞いている俺を尻目に、睦月は会話を続ける。

「その門が開いたら最後。仮地獄にいる全ての罪人は、その海に吸い込まれ、ゲームオーバー・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「けれど、その門が開くとき、ある場所に歪が生じる。」

他のメンバー達が会話を挟む。

「そこは、へその穴といわれているの。」

「僕たちは、3ヶ月後、処刑の日までに、そのへその穴へたどり着かなきゃならないんだ！」

「そうすれば、晴れて生き返れるってわけだ。」

「けど、そこにたどり着くまでには、門番たちの、そして閻魔の目を潜り抜けてかなきゃならないの」

「閻魔死ね！死ね！死ね！」

「これが、俺達の計画。」

俺達はこんな、

空が緑色じゃなくて、あの清清しかった青空を、清らしい朝を迎え

るために。

自分が犯した罪を、もう一度、生きて償うために。

この脱出計画を立てたんだ。題して・・・」

モーニング・コール

それが、彼らの立てた最後の希望の旗だった。
自分の罪に後悔し、生きて償うことを選んだ罪人達の最後の賭け。
それがこのプランというわけだった。

その日は仲裁を終えた宗吾の計らいによって、いったん全員で睡眠をとることにした。

時間は、いつのまにか真夜中を回っていた。といっても、ここじゃ太陽は沈まないし、空は緑だし、雲は相変わらず真っ黒。

鳥は縦横無尽に飛び回るし、とてもこれじゃ時間なんてわかるはずが無かった。

与えられたベッドの中で、俺は考えた。

今もし生き返っても、周りからはどう思われる・・・？

なぜ生きてるんだとか、そんな屈辱の言葉を浴びせられるだけなんじゃないのか？

なぜ、そうまでして。なぜここまでのリスクを負ってまで、生き返る必要がある？

俺は自分が嫌いじゃなかったのか？

いつそこはチャンスじゃないか。嫌いな自分から抜け出すチャンスじゃないのか？

いや、まだだ。まだ人々に、ここに天城義人がいたということを証明できていない。

ただ死んで、それで誰からも忘れ去られていくなんて末路はごめんだ。

・・・・・・・・待てよ？それこそ何の意味がある？

存在を証明できても、結局俺は自分が嫌いなわけで、また自己嫌悪の海に飲まれるだけじゃないのか・・・・？

けど、なぜこうも無理に生き返ろうとしている？

厳望は言った。生きて罪を償いたい。そのためにこのプランを立てたと。

なら、俺は、償うために、生き返るのか・・・・？

それとも、ただだらしなく、楽な人生を生きたいだけなのか・・・・？

そして、今。

「君！どうやって死んだの！？ねえねえ！」

元氣いっぱい死因を聞かれても、こちらとしては回答に困るだけなのだが・・・

仕方なく俺は、重たい体を起こして少年をベッドからおろし、ベッドの横側にたった少年に、背中の死傷を見せた。

「なんで死んだのかはわからないけど・・・とりあえずこの傷だけでも見せておくよ」

今の俺の背中の詳細を、宗吾から聞いたら、次のように話した。

・背中の肉は剥がれ落ち、その生々しい赤色をした人肉をさらしている。

・その肉が剥がれ落ちた跡からは、無数のヒビが入った背骨が背中

の肉からこんにちはしている。

・まだビクビクと動いている。きもい。

最後のは単なる宗吾の悪口だが、俺の背中は今とんでもない状態になってしまっているのだ。

少年は俺の背中を、舐め回すようにじろじろと見続けた。

正直、こんな背中をじろじろと見られて、心の涙が止まらない。

「へえ！昨日はあんまり見られなかったけど、こんなえぐいことになってたんだね！」

嘗め回すかのごとくじっくり背中を見られて、さらにえぐいとも言われれば、俺のガラスのハートを破壊するのに十分すぎる威力だった。

外と見てみた。

何も変わっていない。相変わらずカラフルな世界だ。

だが、もし、昨日のプランのことが本当なら、こんな景色からおさ
らばできる。

そうだ、俺は、こんな景色はもううんざりだ。

あの空の澄んだ青色が見たい。

翼を自由に広げて旅立つ鳥達を見たい。

あの真っ白な雲を見上げたい。

そうだ。こんな気持ちの悪い景色から、抜け出すために、俺は生き返るんだ。

そう、自分に言い聞かせた。

今は、そう思うことにしよう。

答えを見つける、そのときまで。

宗吾が俺を見つめている。
一足早く起きていたようだ。

「あ！宗吾おはよう！」

「ああ、おはよう」

正春・・・チビの元気な挨拶に、宗吾は無気力な声で答えた。

しかし、それとは逆に、目つきは今まで見たことも無いような鋭い眼光を放っていた。
まるで、何かを決心したかのような。
あれは、覚悟の目だ

「義人、全員を起こせ。プランの説明をする。」

「あ、ああ・・・」

俺は、そのときの宗吾の目に、恐怖のようなものを感じた気がした。

t
o

b
e

c
o
u
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.

第四章 策【前】（後書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした。

最近忙しくて、プロットが間に合いません。助けてください。

ホントに猫の手も借りたいってこういうことを言うんですね・・・

これから更新ペースを元に戻して生きたいと思います。

では、ごきげんよう。

P S ; B U M P . . . 新曲待ってたんだぞ・・・

第五章 策【後】（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした。
少し短いですが、後編をどうぞ。

GO！
←

第五章 策【後】

瞳は星よりも速く 黒い毛は夜よりも深く
誰にも気付かれずにあなたを待つ私
長い 長い猫

ある歌に、こんな感じの歌詞があつたのを思い出した。

俺はこの歌の

誰にも気付かれずにあなたを待つ私

のフレーズに惹かれた

まるで、自分のことを言っているようでなんだか親近感が沸いたからだ。

母が夜の女王として、男の媚を売りに街へ行くのを、黙って見送っていたあの頃。

俺は一人、家の中で母の帰りを待っていた。

家の中で一人、静かにしていると、今まで聞こえてこなかった音が聞こえてきた。

記憶から忘れ去られていた声が、俺の耳まで響いてくる。

俺はこの音が嫌だった。

時計の針の進む音や、冷蔵庫の稼働音。

たまに鳴る柱のきしみ音、そして耳鳴り。

まるで、自分みたいで、こんな音が、自分みたいで惨めに思えて来るからだ。

俺は電子音だった。

誰かを待ち続ける。

誰にも気付かれない。

俺はまさに、この歌の猫と瓜二つだったのかもしれない。

学校へ行っても、友達はおらず。

近所の人たちは、俺に何の興味も示さない。

母でさえ、俺がいないみたいに、平然と体を男に売る。

彼らの心の中に、俺はどこにもいなかった。

けれど、そんな俺は、見つかった。
こんな電子音のような俺を、誰にも気付かれない猫を。

あいつは、見つけた。

「・・・・・・・・・・は？」

俺は間拔けな声を出した。

人生の中で一回も出したことの無いような声を洩らした俺を、宗吾は無気力な眼差しで見つめていた。

何故こんな声を出したかという、宗吾のこれからの俺達が動くプランを聞いたからだ。

俺は眠っている残りの6人をたたき起こし、そして今、事務室の椅子に座っている宗吾から、脱出プランを聞いている最中であつた。蘭はまだ眠たそうな表情をしている。凜平も凜平で、大きなあくびをしてけだるそうにしていた。

凜平のあくびは、それはそれは迫力があつた。

瑞葉はまだ眠っている。さっき起こしたばかりだというのに、笠葉の背中の上で再び夢の世界へ旅立ってしまったている。

睦月は相変わらず暗いオーラを放っている。正直近寄りがたい。

ミドはミドで、起きた後どこかへ行ってしまった。

まるでどこかの秘密結社と戦う正義の野生児のようだった。

「・・・・・・・・もう一度言ってくれるか？」

ワンテンポおいて、俺は宗吾に、もう一度説明をしてくれるように頼むことにした。

「・・・・・・・・これから俺達はどうする？」

宗吾は呆れた顔で言い放った。

「言っただろう。海を渡ると」

海を・・・・・・・・

「」「渡る!？」」「」

俺と凜平と蘭の声が重なる。

俺達の大声に、そばにいたチビがびくっと跳ね上がった。

「義人、凜平、蘭、大きな声を出すな。誰かに聞かれる」

「あ、ああ………」

「チッ………」

「あ、うん………」

厳望に大きく釘を刺された俺達は、改めて事務室の椅子に座っている宗吾を見つめた。

「で、宗吾。詳しくプランを聞かせろや。」

義手の調整をしながら、厳望は宗吾に調整を促した。

「この街に港があるな、義人。」

「あ、ああ……ここから南、ちょうどあのひんねり曲がったビルの方角へ行けば、たぶんだけど、普段は猟師たちが使ってる港にいけないと………思う」

ここは、自分の地元だから、ここらへんの街の構造は、大体わかっているつもりだ。

いや、ここらへんといっても、地獄のここのことではないのだが。

「そこに、今日、大きな船が来る。」

船……？

俺が知っている限りでは、その港には漁船かそこらの小さな船しかなかったはずだが……

「罪人を運び出す船だ。そこに罪人達をいれ、ヨーロッパのある場所の保管庫まで運び、裁きのときを待つ。閻魔の奴が、罪人達に危機感を思わせるためにするデモンストレーションのようなものだ。」

「実際は門が開いた瞬間、全ての罪人が本来の地獄へ吸い込まれちゃうからねえ」

笠葉が会話に割り込む。

瑞葉を背負うその姿は、まるで母親のようだった。

「で、その船がどうしたって？」

厳望が話を進めるよう促す
宗吾は応えた。

「その船に乗る」

・ ・ ・ ・ ・ ん？待てよ？その船にのるって、その船は罪人を運び出して、ヨーロッパの保管庫、まあ刑務所みたいなもんに入れるわけで。

・ ・
いわゆる船版パトカーみたいなもんだよな。それに乗るって・ ・ ・

「「自分から捕まりに行くって事じゃねーか！（じゃないの！）」

「」

凜平と蘭と俺の声が重なる。

ゴスッ

俺と凜平、蘭は厳望の拳骨を脳天に食らわされた。
ここにきてから殴られることが多くなった気がする。

「……でもよ宗吾、その案には俺も納得しかねるぞ。」

厳望が顔をしかめて宗吾をにらむ。

確かに、どうしてそんなパトカーのような船に9人総出で乗らなければならぬんだ。

大体俺達の目的は、穴に向かうことなのに、どうして今捕まらなければならぬんだ。

そんな疑問を頭にめぐらせていると、笠葉も宗吾にいちやもんをつけてきた。

「そうよ、なんで肥溜めみたいなどころに行かなくちゃならないのよ。肌が汚れるじゃない」

「……そっちなかよ」

厳望と笠葉のコントはさておき、宗吾は忠告した。

「勘違いするな。捕まりに行く馬鹿がどこにいる」

「? どういうことだ?」

宗吾は詳しい説明を開始した。

「船はヨーロッパまで行く。俺達はその船に密航する。」

「その途中で、別の船が燃料を供給しに、俺達が乗る船に密着する。」

「その船は、オーストラリアから来る。うまくその船に忍び込むことができれば、一気にオーストラリアへ向かうことができる。」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。」

俺は疑問を口にすべき、宗吾の説明を止めた。

「なんだ?」

「その、穴の場所ってわかってるのか?」

「俺が調査したところ、穴はオーストラリア周辺の島国、ニューカレドニアにある。このプランが成功すれば、大幅なショートカットになるというわけだ。」

そこまで宗吾が口にしたとき、厳望が首をかしげた。

「まだ納得できねえな。確かにプランの内容はいい。だが、そのプランの失敗した場合はどうする？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれほど饒舌に、淡々としゃべっていた宗吾が、ぱったりと口を閉ざしてしまった。

宗吾の目つきは、見る見る険しくなってゆく。

「どうやら博打でもしたいようだな・・・・!!」

厳望が怒っている。

おそらく成功の根拠が無いのにプランの説明をしたからであろう。

俺だってこの計画はおかしいと思う。

もし、船の奴らに見つかって保管庫にでも入れられるとする。
脱出するにしてもそれなりの対策は必要だ。しかし今の俺達には、
そんなエスケープ用の小道具なんか無い。

脱出できたとしても、そこから3ヶ月でニューカレドニアまでたどり着けるか。

いや、応えは否だ。

ヨーロッパとオーストラリアじゃ、距離がありすぎて、とても3ヶ月でオーストラリアまでたどり着けない。

どう考えても、リスクがでかすぎる。

巖望が宗吾の胸倉を掴む。

「こんなくだらねえプランのために俺達を起したってのか！？ああ
！？」

「巖望落ち着けて！！」

さっきは拳骨をかまされていた凜平だが、こんどは凜平が嚴望をとめている。

立場が逆転していることにはかまわず、嚴望は宗吾をにらみつけ、怒鳴りつける。

ガスッ

「つつ!!?!?!」

ガタンッ!!

「そ、宗吾!?!」

突如、宗吾は厳望の頬を左腕で力いっぱい殴り倒した。
殴られた衝撃で、厳望は本棚にたたきつけられた。

笠葉は驚きを隠せなかった。

俺も同じくして、驚きを隠せなかった。

あの宗吾の、意外な一面を見たからである。

宗吾はなおも殴ろうと、厳望に近寄ってくる。

厳望は目を丸くして、宗吾を見つめた。

宗吾の目は、すさまじく充血しており、宗吾の風貌を合わせあって、俺は宗吾に対して、恐怖を感じた。

「お。おい！やめろって！」

「ホントだぞ！落ち着けて宗吾！」

俺と凜平がとめに入るも、宗吾は止まらない。

俺と凜平が手で押さえつけても、宗吾は止まらなかった。

「そ、そうご……」

チビが覚えている。

確かに、老人が怒り狂う姿など、子供にとっては脅威以外の何者でもないだろう。

宗吾は、かすれた声で、何かを言った。

けれど、俺には完全には聞き取れなかった。

「……間が……い……だ……」

「はい、そこまで」

瑞葉が厳望と宗吾の間に入る。

いつの間にかおきていて、この事態を見ていたようだ。

「厳望の言い分も、よくわかるよ。確かにリスクは大きい」

「だったら・・・！」

声を荒げる厳望を、瑞葉は静かになだめるように言った。

「でも、ここから地上ルートでオーストラリアまでいけないでしょ

？漁船とかはみんな、海の見張りにとられちゃってるんだから、ここでこの船を利用しないと、穴までたどり着けないよ？」

「でもよお・・・！」

納得のいかない巖望をよそに、宗吾はいつの間にか、事務室から抜け出していることに気付いた。

次の日の朝まで、宗吾は帰ってこなかった。

結局あの後、プランは実行することに決まった。
巖望は納得できていないようだったが、確かにそれしか方法が無い

のは、悔しい事実だった。

「宗吾・・・・・・・・」

俺の心に、何か突っかかっていた。

まだ時間はたっぷりある。

しかし、昨日の宗吾のプランや、行動は異常だ。

朝帰ってきた宗吾を見つめて、俺は思った。

焦っている・・・・・・・・のか・・・・・・・・？

プラン。決行は明日。

失敗は、許されない。

t
o
b
e
c
o
u
n
t
i
n
u
e
d
—
—
—
—
—
—

第五章 策【後】（後書き）

テストが終わって気分晴れ晴れの懷中車です。

最近のゲーム機はすごいですね。

彼女を作るゲームソフト・・・面白いソフトだ。この懷中車の生まれ代には僕の家にはクラッシュバンディグーしかなかった・・・（実話）

では、今回から更新ペースを戻していきたいと思っていますので、これからよろしくお願いします。

では、次回の懷中車に、パロスペシャルッ！（？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0428i/>

HELLO MORNING

2010年10月23日13時31分発行